

小さなものの力

(創基150年記念事業をほぼ終えて)



柴田 正良

創基150年記念事業
準備委員会委員長

「静かに、そして粛々と」という言葉だったかどうかはもはや自信がないが、およそ4年前に、中村信一学長から創基150年記念事業のイメージを伺ったときは、巷に花火のごとく打ち上がるこの種の多くの記念事業とは趣を異にしていることに、少し安心したものだ。そのとき「これだけは」と学長から示された大きな事業は、彦三種痘所の記念碑建立、150年史の刊行、記念式典の挙行の3つだけだった。その後、新制金沢大学発足の記念碑を金沢城公園内に設置する事業と、準備委員会発案による「アジア5大学学長フォーラム」の開催が加わったとはいえ、記念事業全体は一貫してシンプルで、控え目なものだと言えよう。

そういうわけで、記念事業のシンボルマークの制定や「先魁・共存・創造」というコンセプトの設定といった準備作業を進めていくなかで、私には、この事業の真の意義が「大きなもの」の誇示にあるのではなく、「小さなもの」の力の結集にあるように思われてきた。それは具体的には、できるだけ多くの本学関係者に、できるだけ様々な場面で、この事業に関与してもらうということであった。意外に思われるかもしれないが、私には、「学長フォーラム」のような巨大なイベントより、現時点で28テーマを数える「自主企画」や60回を超す「講演会・シンポジウム」シリーズの方がある意味で貴重であり、また「学長フォーラム」をとってみても、華々しいパフォーマンスより、それぞれの持ち場で重ねられた準備の一つ一つの方が主役であるように思われた。

そもそも大学の歴史を振り返り、未来に思いを馳せることにどんな意味があるのだろうか。それは、言わずもがなのイベントを無事に完遂することより、その実行を通して、できるだけ多くの関係者が社会における大学の位置と、大学における自分の位置を素直に確かめることにあるのではないか。しかし、その意味で本事業は、どれほどの成果を上げたのか。大方の叱正を待つばかりである。

「過去を再び思い出すことは、未来を確かなものにしようとするための方法なのであった」(A.R.ルリア『失われた世界』海鳴社、p.117)。戦争で脳に弾丸を受け、ほとんどすべての記憶を失った患者は、私たちより遙かに深い位置で、遙かに絶望しながら、自分が何であるかを必死に取り戻そうとしている。そうだ、金沢大学が何であるかは、誰にとっても、すでに与えられたものではなく、常に創り上げていくべきものなのだ。

(平成24年9月10日)